

立証責任

上

スコット・トゥロー

上田公子 [訳]

THE BURDEN OF
PROOF
SCOTT TUROW

文藝春秋

立証責任

①

スコット・トゥロー
上田公子 [訳]

THE BURDEN OF

THE BURDEN OF PROOF
BY SCOTT TUROW
COPYRIGHT © 1990 BY SCOTT TUROW
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH BRANDT & BRANDT LITERARY AGENTS, INC., NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

立証責任 上

一九九三年九月二五日第一刷

著者 スコット・トゥロー

訳者 上田公子

発行者 松浦伶

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話〓〇三―三二六五―二二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示しております。

ISBN4-16-314250-9

42.300

ア
ネ
ッ
ト
に

(われわれの) 決定は、家族の生活という、州の介入あたわざる個人的領域を尊重したものである。

プリンス対マサチューセッツ州、三二一 U. S. 一五八、一六六(一九四四)、
合衆国最高裁判所の意見

わたしはかつて非常に聡明な男性の夫婦関係改善を手がけたことがある……彼は絶えず離婚を考えていたが、幼い子供ふたりを深く愛していたので、その考えをしりぞけつつづけていた……ある日、この患者は、彼を極度に驚愕させた小事件のことをわたしに話した。彼のお気に入りである上の子供と遊んでいて、子供を空中高く放り上げていたのだが、ついにあまりにも高く放りすぎて子供の頭がガス灯のシャンデリアにぶつかりそうになった……(子供は)恐怖で目をまわしてしまった……こうした不注意な行為をたやすくやってしまったという事実から……わたしはこのできごとを象徴的行動としてとらえてみようとしたのである……

この患者の子供時代の記憶に、事実、強力な反応決定因があった。それは弟の死に関するもので、母親はそれを父親の不注意のせいにし、その結果、両親のあいだには離婚を口にする深刻な夫婦喧嘩の絶え間がなかったのだ。その後の患者の生活とセラピーの成功は、わたしの分析を裏づけるものであった。

ジークムント・フロイト

日常生活の精神病理学

立証責任
上

装幀
坂田政則

第一部

三十一年間の結婚生活だった。そして来春、決意に満ち、ある程度の希望をもって、彼は再婚しようとしている。しかしあの日、三月の終わりに近いあの日の午後遅く、帰宅したミスター・アレハンドロ・スターンは、アタッシェケースとガーメント・バッグを手にしたまま、やや上の空で玄関から妻のクララを呼んだのだ。五十六歳、短軀で恰幅よく、頭は禿げ、とくにハンサムとは言えないスターンは、そのとき、ほかのことにまったく心を奪われていた。

この二日間、スターンは、彼の依頼人のうちでもっとも厄介な人物、ディクソン・ハートネルの用事で、シカゴ——荒々しい人たちの住むあの大都市——に行っていたのだ。ディクソン・ハートネルは、鉄面皮、自己中心的で、弁護士たちの助言をおおむね軽蔑していた。なかでも最悪なのは、スターンとこの男との契約が永久的なものであるということだった。ディクソンは、スターンの妹シルヴィアの夫、つまり義弟であり、スターンにとってはこの妹シルヴィアこそ、妻子を別にすればただひとりの生存している近親者、長年変わらぬ愛情の対象だったのである。もちろんディクソン本人へのスターンの感情は妹に対するほど純粋なものではない。弁護士生活といっても軽罪専門の裁判所の廊下で依頼人をかき集めるのと大差なかった初期のころには、デ

イクソンのさまざまな予測不能の要求に応えることでなんとか暮らしがたっていた時代もあったけれど、いまではそれが、スターン自身の人間的・職業的責任感の固い土壌に隠然と根をおろした測り知れぬ義務のひとつになっていた。

これはまた、絶え間ない仕事でもあった。商品先物取引の大帝国——若いころにメゾン・ディクソン（MD）と名づけた商品取引会社と、すべてMDという名を冠した各種の子会社——を司るディクソンには始終トラブルがあり、取引所や連邦規制当局、それに国税庁から何年も目をつけられていて、問題が起るたびにスターンが処理してやっていた。

だが、現在の問題は過去のものよりずっと重大だった。ここキンドル郡に置かれている連邦大陪審が、MDの大手法人顧客のうち市外の何社かに文書提出命令状を発行していたのである。お定まりの厳めしい顔をしたFBI捜査官によって送達されたこの令状の話がMD本社に伝わってきたのは一週間前のことで、スターンはちょうど手がけていた事件の裁判が終わるとすぐシカゴへ飛び、こうした法人顧客のうち二社の弁護士と個人的に会って、政府が彼らに提出を要求した文書を調べたのだった。弁護士たちの報告によると、この件の担当検察官であるクロンスキーという名の若い女性検事補は、令状を受けた顧客たち自身が被疑者ではないと言っただけで、政府がだれを疑っているのか正確なところは明らかにしなかったそうだ。しかし、経験を重ねたスターンの目に映る事態は不吉な様相を呈していた。市外への令状発行は秘密保持の意図をあらわす。捜査官たちは自分の求めるものを知っていて、ディクソンもしくは彼の会社、または彼に近い人間のまわりをひそかにとりこむ決意充分と思われた。

こうして、旅の疲れと苛立ちを感じながら、スターンは自宅のタイル張りの玄関に立っていた。

ここは彼と妻クララが二十年近く住みつづけてきた家なのに、その日にかぎって、あれほど突然、あれほど完全に彼の注意を奪ったものは何だったのか？ あれほど静けさだった、とスターンはいつも言う。蛇口からの水音も、ラジオのつぶやきもなく、家庭用の器具の音もいっさい聞こえない。孤独を好むスターンにとって、静寂はつねにある種の慰めをもたらすものだったけれど、このときは、休息の静けさとか、仕事を一時中断した静けさとはまったく違っていった。スターンはバグを黒いタイルの床に置くと、急いで玄関をつきつていった。

「クララ？」彼はふたたび妻の名を呼んだ。

スターンは彼女をガレージで発見した。ドアを開けたとき、異臭がわつと襲いかかり、その強烈な鼻をつく臭いを一息吸ったとたんに目がくらんで吐き気が胸をつき上げた。クララの車、黒いセヴィルの新車がガレージの奥にこちら向きにとまり、運転席のドアが開いていた。白っぽい車内灯がつけばなしのため、暗いガレージのなかで彼女は弱いスポットライトに照らされたかたちだった。ガレージの戸口に立つスターンの目に、コンクリートの床に伸びた片脚と明るい花柄のシャツドレスの裾が見えた。脚の光沢からストッキングを履いているとわかった。

のろのろとスターンはガレージに入っていった。ガレージ内の熱気と一歩ごとに強くなる例の臭いに圧倒され、暗がりのなかで恐れのために体の力が抜けた。開いた車のドア越しに妻の姿が見えたとき、もうそれ以上進めなくなった。クララはらくだ色の革のフロントシートにもたれていた。最初に気づいたのは、肌が不自然な桃色に光っていることだった。目は閉じている。最後まで身ぎれいで平静な外観を保つつもりだったらしく、完璧にマニキュアされた左手を儀式的に見えるほどきちんと腹部に置いているが、結婚指輪の下肉がやや腫れあがっていた。車内には

何も持ちこんでいない。上着もハンドバッグもなし。体は完全にうしろに倒れているわけではなく、右手がぎこちなく伸びてハンドルにかかり、頭はシートを背に、とても信じがたい絶望的な角度で傾いている。開いた口から舌が突き出し、顔には動きも生の気配もない。スターンはガレージに隣接する白塗りの洗濯室に駆けこんで磁器製の流しのひとつに吐いた。そして流しをすっかり洗い流してから急報番号九一一をダイヤルし、次に息子に電話した。

「大至急来てくれ」スターンは、運よく自宅にいた息子のピーターに言った。「大至急」緊急時の常で、自分のかすかなヒスパニック訛りがはつきり聞きとれた。訛りはいつも存在し、スターンはそれを身体障害とおなじような不治のものと考えていた。

「お母さんがどうかしたんですね」とピーターは言った。スターンはそれらしきことをひとことも言わなかったのに、こういう事柄に対する息子の勘は正確だ。「シカゴで何があったんです？」いっしょに行ったのではないとスターンが答えると、最初の直感に忠実なピーターは抗議しはじめた。「どうしてお母さんは行かなかったんです？　お父さんが発つ日の朝、電話でそうしろと言ったのに」

恐ろしい自己憐憫の情がスターンの心を引き裂いた。感情の水路がどうしようもなくもつれてしまい、途方にくれた思いだった。そのあと何時間もたって、朝方近く、ぼつんと灯る明かりの下にひとりで坐ってシェリーをすすりながら、その日の重大な瞬間ひとつひとつを思い返し分析していたときはじめて、ピーターの言葉の意味を完全にさとしたのだが、そのときはまだ理解できず、息子に対する内心の苛立ち、抑圧された火山性の激しい力を感じただけだった。とはいえ、心のどこかでは息子の言葉に隠された最初の手がかりを読みとって、言いあらわせぬ悔恨の

大穴が口を開きはじめた。

「とにかくすぐ来てくれ、ピーター。何が起こったのか、正確には見当もつかないんだが、ピーター、お母さんは死んでいるんだ。そう思う」

スターンの息子、三十歳のピーターは、短くかんだかい音、悲しみに満ちた叫びを發した。

「そう思うだって？」

「頼む、ピーター。お前の助けが要る。たいへんなときなんだから。すぐ来てほしい。わたしを尋問するのはそのあとだ」

「いったい何がどうなってるんだ？ どういうことなんです？ いまどこにいるんですか？」

「うちだよ、ピーター。いまはお前の質問に答えられない。頼むから来てくれ。ひとりではとてもだめだ」そう言うなりだしぬけに電話を切った。手が震えている。スターンはふたたび流しにかがみこんだ。つい一瞬前にはあれほど冷静で落ち着いていたように見えたのに、いまは体内に耐えがたい痛みが湧き起こり、失神しそうな感じだった。まずネクタイをはずし、それから上着を脱ぎ、ガレージのドアの前に戻った。だがドアを押しあけることはできなかった。ほんの一瞬でも待つていれば、事態が理解できるのではないかと思われた。

間もなく、家はスターンの知らない人たちでいっぱいになった。最初は警察で、ふたりずつ組になった警官たちがそれぞれ思い思いの角度で車をとめ、それから救急車と救急隊員がやってきた。窓から外をのぞいたスターンの目に、道向こうの芝生に集まってきている近所の人たちの姿が見えた。回転灯を光らせたパトカーの列のうしろに押しとどめられた群集は、車が着くたびス

ターン家のほうに身をのりだしてさきやき交わしている。家のなかでは、警官たちがいつもながらの尊大な態度で歩きまわり、ときどき携帯無線機が耳障りな雑音をまじえてがなりたてる。彼らはガレージに出たり入ったりして死体をぼかんとみつめ、スターンの存在をまったく無視した口調でこの事件のことを話す。そしてスターン家の高価な品々を、当惑するほどあからさまな羨望の目で眺めるのだった。

最初にガレージに入った警官は、出てくるとすぐ、警部補の派遣を要請するため署に無線連絡した。

「もうおダブツだ」警官は署の通信係に言った。「警部補にマスクと手袋を持ってきたほうがいいと言ってくれ」そのときはじめて、洗濯室の外の暗い廊下に潜むように立っているスターンに気づいた警官は、あわてて彼に説明しはじめた。「あの車、一日じゅうエンジンがかかりっぱなしだったようです。燃料計の表示はゼロ、触媒コンバーターはバーベキューより熱くなっている——三、四百度はあるでしょうな。閉めきった場所でエンジンを十二時間かけっぱなしにすると、ものすごい熱さになる。あれじゃあたまりませんよ。おたくはご主人？」

そうだ、とスターンは答えた。

「お気の毒に」と警官は言った。「ひどいことで」

ふたりはしばらく待った。

「何が起こったのか、そちらの考えは？」スターンはたずねた。自分がいま何を考えているのかわからなかったが、ただ、最悪の結論に早くとびついてしまうのは一種の裏切り行為のような気がしたのだ。警官は無言のままスターンの質問について考えていた。ふとって赤ら顔のこの男は、